

大学と自治体の地域連携における学生の学び：地域 活性化新聞「岡垣歴史新聞」プロジェクト

山田, 明
九州共立大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/2202980>

出版情報：生活体験学習研究. 17, pp.23-31, 2017-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

大学と自治体の地域連携における学生の学び

— 地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」プロジェクト —

山 田 明*

What University Students Learned through a Regional Cooperation Project between Kyushu Kyoritsu University and Okagaki Local Government

— The History Newspaper Project —

Yamada Akira*

要旨 大学と自治体の地域連携事業に基づく社会貢献に関して、活動した学生にみられる学びの効果をシティズンシップ（市民性）の視点から明らかにする。九州共立大学と福岡県岡垣町の包括的地域連携協定が2015年に成立、テーマを地域活性化・福祉向上・生涯学習等とし、初年度（2016）は地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」（郷土の魅力を再発見する歴史新聞）を企画した。学生の学びの効果については、自己アンケート、ループリック評価、インタビュー、自治体関係者及び住民の評価等から、市民性の向上が認められた。地域の住民も地域活性化へのきっかけや雰囲気づくりにつながったと評価した。学生は自己の成長を自覚したが課題も発見した。真の地域貢献活動とは地域住民による持続可能な地域活性化への支援にある。学生の地域貢献が住民の主体性にどう生かされていくかという課題を体得できたことも学生の成長である。

キーワード 地域連携 社会貢献 シティズンシップ（市民性） サービス・ラーニング

1. はじめに ～地域連携と学生の学び～

地域連携とは、一体感のある住民の生活圏における地域（自治体）と他の組織、例えば大学、事業者等が同じ目的で協働しお互いの目的を達成しようとする試みである。大学と自治体の連携事業は、学生と教員が地域の現場に入り住民とともに課題解決や地域づくりに継続的に取り組む活動である。活動事例には、地域振興プラン、課題解決への実態調査、商店街の活性化、環境保全活動等がある。今回の地域連携事業は、町が持つ歴史資源を活用しその魅力を再発見する地域活性化新聞（「岡垣歴史新聞」）発刊の取り組み¹⁾である。

地域連携を通して学生は何を学ぶことができる

のか。若者に求められている資質・能力は社会を生き抜く力とその基盤となる自己肯定感であり、現在ではシティズンシップ（市民性、以下「市民性」とする。）²⁾ともいわれている。著者は、高校生の地域貢献を通した市民性の涵養に関する研究で一定の学びの効果を検証してきた³⁾。今回は対象を大学生とし、大学と自治体との地域連携事業プロジェクトを通して学びの効果を検証する。現代の若者には社会体験の不足という課題があり、その意味で社会貢献活動は貴重な機会となる。この教育方法は米国発祥の社会貢献学習であるサービス・ラーニング⁴⁾であり、参加者が現実社会での直接体験を通して学ぶことを特徴とする。本稿では、このサービス・

*九州共立大学スポーツ学部
連絡先：〒807-8585 福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8
E-mail: y-akira@kyukyo-u.ac.jp

ラーニングによる市民性の涵養の視点で大学と自治体の地域連携における学生の学びを考察する。その際、学生の専門性と市民性の涵養、学生に求められる自治体（住民）との協働による真の地域課題の発見という点についても検証する。

2. 大学と自治体との地域連携

大学と地域が連携することで、大学・学生・地域それぞれに効果もたらされることが期待される。地域連携が要請されてきた教育的要請の経緯は以下の通りである⁵⁾。

(1) 地域連携の教育的要請

①中央教育審議会答申「わが国の高等教育の将来像」（2005年）

大学を中心とした社会貢献について、答申では「大学は、教育と研究を本来的な使命としているが、現在においては、大学の社会貢献の重要度が強調されるようになってきている。(中略) こうした社会貢献の役割を、言わば大学の第三の使命としてとらえていく時代になってきているものと考えられる。」と指摘した。

②教育基本法第7条（2006年改正）

改正教育基本法により「大学は学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創作し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」とされ、大学の使命が従来の教育・研究から教育・研究・社会貢献へと地域への貢献の重要性が示された。

③学校教育法〔大学の目的〕（2007年改正）

改正教育基本法に連動し学校教育法の関係部分も改正された。「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させる」という従来の条文に「大学は、その目的を実現するために教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」を追加した。大学は教育・研究成果を地域に向けて発信し寄与することが要請されるようになった。

④「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）

大学は第三の使命と言われるようになった地域貢

献からさらに地域志向の大学へという要請もなされるようになった。従来、大学は地域に立地しながらも地域に関心を持つことなく地域もまた大学に関心も期待もしない傾向があった⁶⁾。しかし少子高齢化、地域コミュニティの衰退、経済の閉塞感、情報化、グローバル化と国際競争の激化等の社会の変化が大学と地域を連携させるチャンスを生み、地（知）の拠点整備事業として結実した。

(2) 九州共立大学と福岡県岡垣町の包括的地域連携協定

本協定は、双方にとって初めての大学及び地方自治体間での包括的な協定である。岡垣町と九州共立大学の教員及び学生が知識や経験を生かしお互いの課題解決や地域の活性化に資する取り組みが期待される。地域のニーズを基に、地域活性化、人材育成、福祉向上、スポーツ振興、生涯学習等のテーマが策定された。

3. 地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」プロジェクトの概要

(1) 事業目的

学生が岡垣町の地域活性化を目的とした「岡垣歴史新聞」を作成し、町内外に広く配布することにより九州共立大学と岡垣町の地域連携を進展させ、学生の学びの機会、岡垣町の町民（自治体）の町づくりへの寄与、大学の地（知）の拠点化等に効果がある地域貢献活動とする。なお活動期間は2016年4月～12月の9カ月であった。

(2) 活動内容

参加学生は、社会教育・生涯学習の受講生11名であり、教員の指導の下で次の①～⑦の活動を行った。

①事前準備

- (i) 大学での授業（社会教育・生涯学習）と活動の関連性把握
- (ii) 文献及びインターネット等による岡垣町の情報収集
- (iii) 自治体及び関係町民との打ち合わせ
- (iv) 活動計画の企画立案

②岡垣町での取材及びフィールドワーク／③記事の

作成／④新聞の編集・レイアウト・校正／⑤新聞の
 発刊・JR海老津駅での配布／⑥毎日新聞社の取材
 への対応／⑦学生の本活動に関する振り返り [総
 括、アンケート調査、インタビュー等]

(3) 期待される学びの効果

活動を通して、大学・学生・地域に期待される効
 果は以下の通りである。

- ①学生：市民性の涵養／②自治体・町民：地域活性
 化及び町づくりの進展／③大学：地（知）の拠点と
 しての役割

4. 学生の学びの効果

(1) シティズンシップ（市民性）とは

市民性は、個の自立に立脚した主体的な社会参画
 の資質及び能力であり、権利・義務・法・契約・制
 度・システム等の政治的リテラシーを含むものであ
 る。次代を担う若者が社会で活動するために求めら
 れる力は、人間関係の構築のための自己理解・他者
 理解であり、コミュニケーション能力やボランティ
 ア精神がその基盤として必要である。これらの資質
 及び能力は、読み・書き・算の基礎的なリテラシー
 はもちろん、自主性・倫理観・責任感・協調性・
 リーダーシップ・批判的思考力・判断力・表現力等
 であり、総合的にバランス良く身につけられてこそ
 社会で生き抜く上での自己肯定感が高まると考えら
 れる⁷⁾。さらに自立した個人が主体的に社会参画し
 政治的リテラシーを活用して政治や行政に社会の課

題に対する公的解決を要求していくこと、身近な地
 域への意識や参画の能力を涵養していくことで社会
 を改善していく大きな力となりうる。表 [1] は著者
 が考える若者に身に付けさせたい市民性の資質項目
 である。

(2) 学び効果の評価方法

評価方法として、学生の自己評価（事前事後アン
 ケート）、ループリック評価⁸⁾（活動日誌を活用した
 指導者・学生による評価）、インタビュー調査、地域
 （自治体）の評価等を実施した。多様な評価を活用し
 た理由は、活動者が11名と少数であることからアン
 ケート調査等の数的データを補完する意味があっ
 た。また活動日誌の評価については、学生が活動中
 の体験を活動日誌に整理し、その日誌をもとに教員
 の指導の下で常時振り返り（分析）を行った。その
 際、大学での学びと体験の関連を意識化することを
 促した。活動日誌の記入については、評価の観点
 を学生に事前に提示するループリックの手法を取り入
 れ指導者が評価するとともに学生にもループリック
 を使って自己評価をさせた。

(3) 学生の学びの効果

①アンケート [自己評価]

活動期間は2016年4月～12月の9カ月であった。
 市民性の涵養に関するアンケート⁹⁾を4月（事前）、
 12月（事後）に実施、そのデータを多変量解析（t
 検定）で分析した。以下は学びの効果があったと考

表 [1] 市民性の大大項目と主な具体的資質項目

大項目	主な具体的資質項目
主体的社会参画の資質・能力 ①自己理解／②他者理解／③コミュニケーション ／④サービス・ボランティア／⑤政治的・情報リ テラシー	自己肯定感・人権意識・倫理観・学力・規範力・リーダーシップ・課題 発見力・批判的思考力・判断力・人間関係能力・発信力・表現力、権 利・義務・政治システムの理解、情報収集・活用能力

(山田明「高校生に身に付けさせたい資質としての市民性」九州教育学会、2005、p145。)

表 [2] 学習効果の評価方法

評 価	評価者	備 考
1 アンケート	学生	アンケート調査 (50問／事前・事後)
2 活動日誌	教員・学生	ループリック
3 インタビュー	教員	学生全員に対する個別インタビュー
4 地域（自治体）	自治体・住民	評価票及び自由記述

えられる6項目である。

(i) 自己理解・他者理解 表 [3]

「私は、他者に対する責任を感じるができる。」という質問について、事前・事後アンケートともに肯定的意見の数値が高いが、特に「良く該当する・大変よく該当する」という回答が事前36%から事後73%に倍増しており、9カ月にわたる活動で学生同士、地域の人々、自治体関係者等との人間関係づくりを学んだ成果であろう。社会で生きていくために必須の資質及び能力である責任感、現実社会の活動の中で体験として学ぶことで真の力となり得る。今回は地域の人々に聞き取りをする取材も多く、自治体関係者ともコミュニケーションをとりながらの活動であり、それぞれの世代立場の人々との交流の中で責任ある接し方を学んでいったようである。

(ii) 情報リテラシー 表 [4]

「私は、自分が欲しい情報の所在を知ることができる。」という情報リテラシーに関する質問である。「あまり該当しない」という回答が事前37%、事後18%に半減し、「良く該当する」が27%から55%に倍増している。今回は地域活性化新聞の発行という

ことで、取材やフィールドワークをする場合の情報収集が重要な課題であった。事後アンケートでは、肯定的意見（該当する・良く該当する・大変よく該当する）が82%と総じて情報リテラシーのスキルアップに自信を持った様子が見られる。

(iii) 課題解決能力 表 [5]

課題解決能力については2項目の学習効果が見られた。一つは、「私は、目標を達成するための効果的な活動を工夫することができる。」という質問である。社会での活動は設定した目標への取り組みと成果が重要である。その際の工夫は不可欠な資質及び能力である。「あまり該当しない」という回答が事前46%から事後9%と減少し、「良く該当する・大変よく該当する」が27%から64%に増加している。学生としての日常生活と地域での活動で忙しい中、時間や活動の工夫をせざるを得なかったこともスキルが向上した要因であろう。二つ目の「私は、行動の結果を理解・分析する能力がある。」という質問について、「あまり該当しない」が事前・事後で半減、肯定的意見（該当する・良く該当する・大変よく該当する）が事前54%から事後82%と増加している。地域での活動には期待や責任感が常に求められるこ

表 [3] 自己理解・他者理解 N = 11 (%) 有意差 (***) / p < 0.01

「私は、他者に対する責任を感じるができる。」

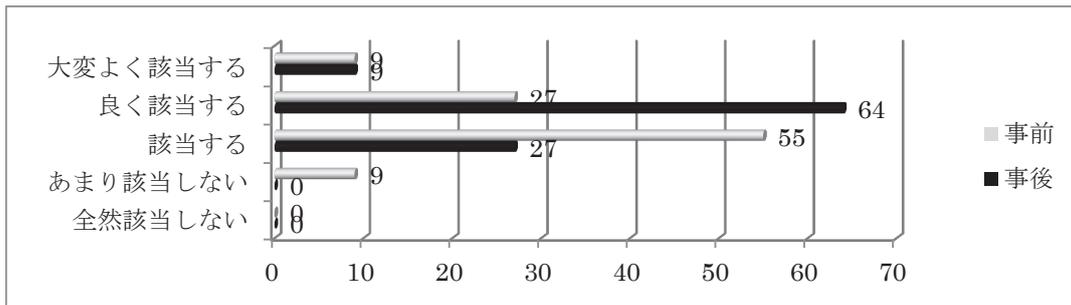


表 [4] 情報リテラシー N = 11 (%) 有意差 (***) / p < 0.01

「私は、自分が欲しい情報の所在を知ることができる。」

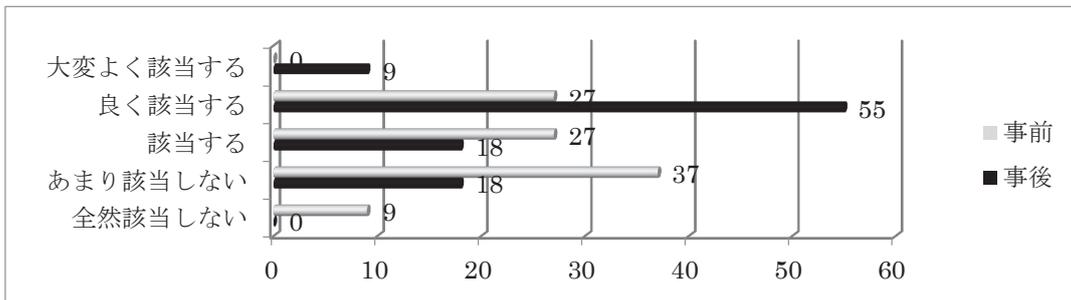
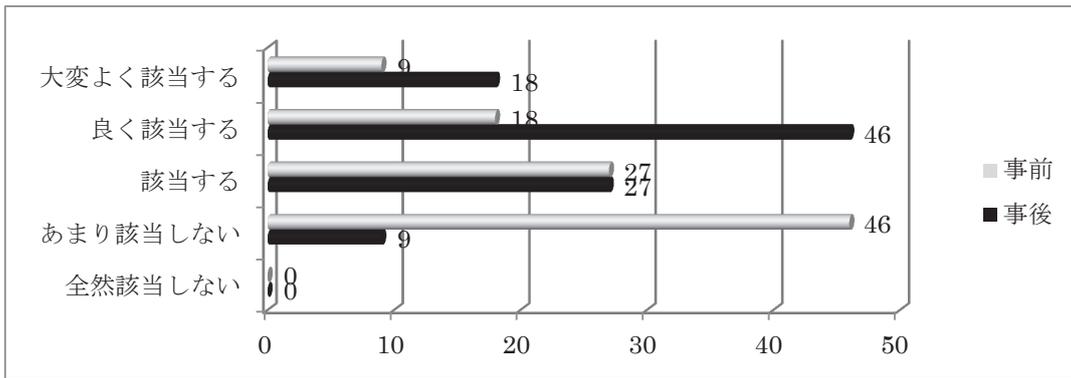


表 [5] 課題解決能力 N = 11 (%) 有意差 (** / p < 0.05)

1 「私は、目標を達成するための効果的な活動を工夫することができる。」



2 「私は、行動の結果を理解・分析する能力がある。」

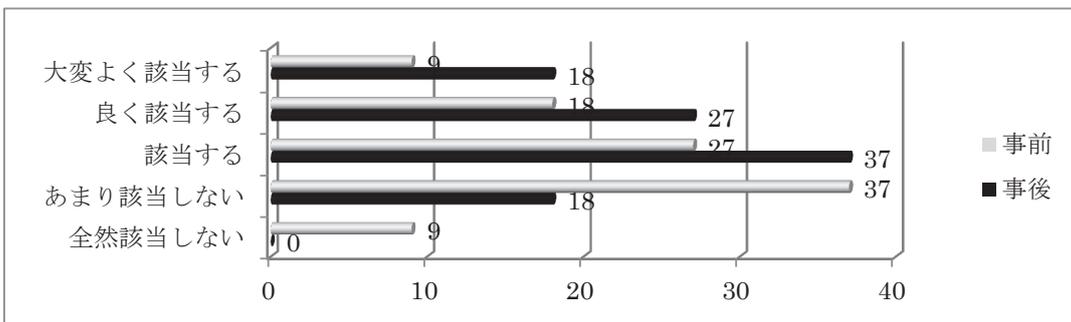
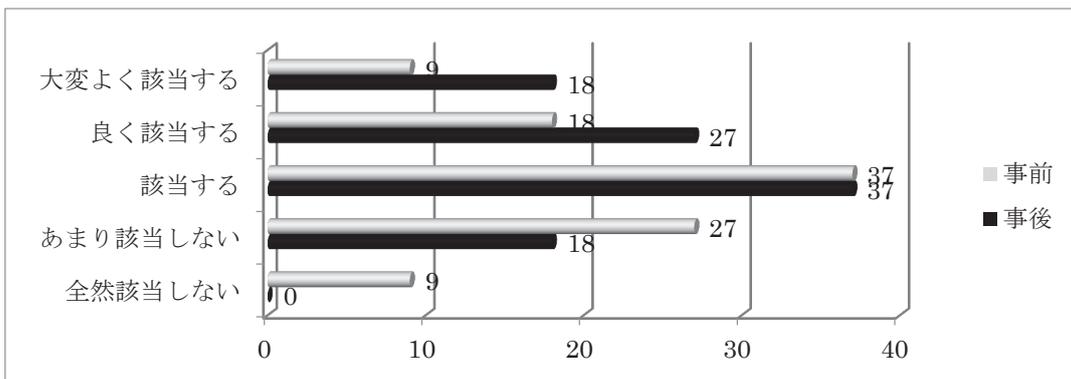
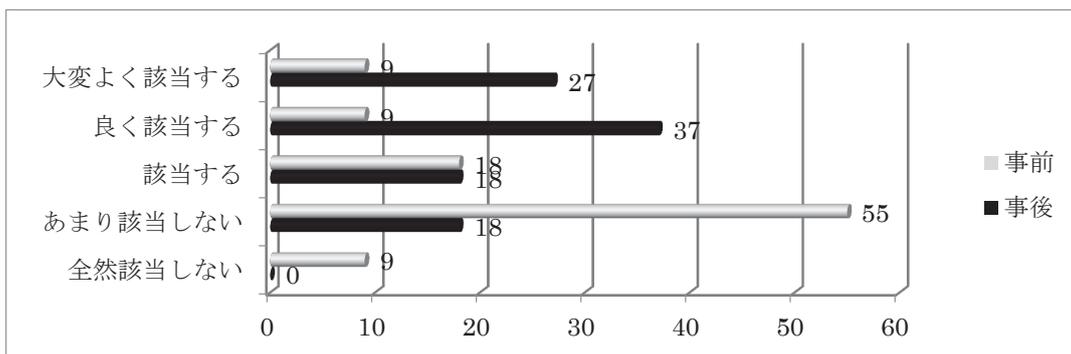


表 [6] 計画実行能力 N = 11 (%) 有意差 (** / p < 0.05)

1 「私は、将来のことをいつも視野に入れることができる。」



2 「私は、計画したことを行動に移す資質や能力がある。」



ともあり成果を出すための工夫が体得できたのではない。但し、「あまり該当しない」という回答が事後で18%あったのはプロジェクトの課題である。

(iv) 計画実行能力 表 [6]

計画実行能力については2項目の学習効果が見られた。プロジェクトの目標の一つは、地域連携における学生の学びについて市民性の涵養におき主体的な社会参画が可能となる資質及び能力を向上させることであった。学生の自己評価（事前・事後アンケート）においては、自己理解・他者理解、情報リテラシー、課題解決能力に一定の学びの効果が見られた。これらを基盤にスキルアップしたと考えられる力が計画実行能力である。「私は、将来のことをいつも視野に入れることができる。」という質問について、肯定的意見（該当する・良く該当する・大変よく該当する）が事前64%から事後82%と向上、特

に「良く該当する・大変よく該当する」について、事前27%が事後45%と広い視野をもって活動できる余裕が生まれている。「私は、計画したことを行動に移す資質や能力がある。」についても肯定的意見が事前36%から事後82%と飛躍的に増加しており、分析を通して立案した計画に工夫を凝らしながら実行に移していくという活動に自信をもったようである。社会で活動するために必要な力であり、プロジェクトがキャリア教育にもなったと考えられる。

②活動日誌

(i) 指導者による評価

プロジェクトでは、学生に9カ月間にわたり常時、活動日誌を活用した振り返りをさせ学びの内容を確認しながら進めた。その際、学んでもらいたい観点を設定した。表 [7] は学生に示したルーブリック（著者作成）であり、表 [8] はプロジェクト終了

表 [7] ルーブリックを活用した活動日誌の評価の観点

	非常に良い 4	良い 3	要改善 2	悪い 1
(1)地域ニーズの把握	地域の真のニーズを体感して述べている。	地域の真のニーズを得ようと努めた。	地域の真のニーズを十分意識していない。	地域の真のニーズを意識していない。
(2)活動と学びの関連	活動と科目の関連性を詳細に述べている。	活動と科目の関連性を述べている。	活動と科目の関連性を十分に意識していない。	活動と科目の関連性を意識していない。
(3)今日の体験	体験の意義に関し振り返りを詳細にしている。	体験の意義に関し振り返りをしている。	体験の意義に関し振り返りを十分にしていない。	体験の意義に関し振り返りをしていない。
(4)明日への改善点	自分に何が足りないかを詳細に分析している。	自分に何が足りないかを分析している。	自分に何が足りないかを十分に分析していない。	自分に何が足りないかを分析していない。
(5)市民性の涵養 *主体的社会参画	何ができるようになり、何を考えるようになったかを詳細に考察している。	何ができるようになり、何を考えるようになったかを考察している。	何ができるようになり、何を考えるようになったかを十分に考察していない。	何ができるようになり、何を考えるようになったかを考察していない。

表 [8] ルーブリックを活用した活動日誌の評価（指導者評価/プロジェクト終了時）

学生 \ 観点	地域ニーズの把握	活動と学びの関連	今日の体験	明日への改善点	市民性の涵養	総合評価 * 20点
I	4	4	4	4	4	20
II	4	4	4	3	4	19
III	4	4	3	3	4	18
IV	4	3	4	3	3	17
V	3	3	3	3	4	16
VI	2	3	3	4	4	16
VII	3	3	3	3	3	15
VIII	3	2	3	3	3	14
IX	3	2	3	2	3	13
X	2	2	3	3	3	13
XI	2	2	4	2	3	13
平均	3.1	2.9	3.4	3.0	3.5	15.8

時の指導者評価である。ルーブリック評価の目的の一つは、指導者と学生が目指す成果の内容を事前に共有することにある。「市民性の涵養」が最も高い評価となった。事前学習において評価の観点を示し活動中も言及したが項目によって効果を体感できにくかったものがあった。例えば「地域のニーズの把握」、「活動と学びの関連」、「明日への改善点」である。「地域のニーズの把握」については、プロジェクトで接した自治体関係者や住民とのコミュニケーション不足、特に学生の主体的なコミュニケーションの不足があったようだ。「活動と学びの関連」については、大学での授業（社会教育・生涯学習）との関連性を指導者及び学生が意識化することがさらに必要である。「明日への改善点」については、学生が地域の課題を理解しどのようにして解決していくかの知識や経験が不足していたものと考えられる。ルーブリックを活用する意義を再認識しプロジェクトの成果を上げるためには、より具体的な活動計画の構築と学生への意識化を行うことが重要である。

(ii) 学生による自己評価

ルーブリックにおける指導者と学生の評価の関係性について、指導者評価による上位3名についての学生の評価が表 [9]、下位3名については表 [10] である。学生の自己評価によると上位の3名、学生 I・II が20点満点中20点、学生III 19点、下位の3名は学生IX・X が14点、学生XI が15点となっている。指導者評価と同じか、1～2ポイント高くなっているが、同程度の数値となっておりルーブリック評価は指導者と学生に共有されたと考えることができ

る。各学生の評価が指導者の評価より少しではあるが高い傾向にあることは、自己肯定感の高まりに良い影響を与えているのではないかと考えられる。

③学生へのインタビュー

プロジェクト終了後、市民性の涵養の観点からインタビューを実施した。以下は各質問に対する学生全員（11名）の意見を著者が要約したものである。

(i) 質問：「地域社会の問題についてより深く学んだか」

[回答] 自治体や地域住民の方と接する機会があったが、自分の準備不足もあって地域の事情を質問することが十分にできなかった。／地域の方に聞きたいことがあったが会話がスムーズにできなかった。／質問する際には、準備された知識と聞き出すスキルが必要だと感じた。／ボランティアを経験する機会があったからこそ、活動する地域のことに興味を持つことができ学ぶことが多かった。

(ii) 質問：「自分の活動が地域に何らかの影響（効果）を与えることに気づいたか」

[回答] フィールドワークや取材で訪れた地域の人々が、私たち学生に期待していることを感じた。／住民に新聞を配布したとき、記事の内容から身近な郷土の歴史を再発見した反応があり、その魅力が地域の人々の誇りにつながっていると感じた。

(iii) 質問：「どのようなスキルが向上したと思うか」

[回答] フィールドワークによる事実の確認、読み手の立場で記事にする文章力、表現力、伝える力、事前準備における計画立案能力等。

表 [9] 指導者評価における上位3名の学生の自己評価

学生	観点	地域ニーズの把握	活動と学びの関連	今日の体験	明日への改善点	市民性の涵養	総合評価 * 20点
I		4	4	4	4	4	20
II		4	4	4	4	4	20
III		4	4	3	4	4	19

表 [10] 指導者評価における下位3名の学生の自己評価

学生	観点	地域ニーズの把握	活動と学びの関連	今日の体験	明日への改善点	市民性の涵養	総合評価 * 20点
IX		3	3	3	2	3	14
X		3	2	3	3	3	14
XI		3	3	3	3	3	15

(iv) 質問：「情報リテラシー(情報を得る方法の工夫)は向上したか」

[回答] 地域の情報はインターネットでは得にくいこともある。その場合には住民に直接聞くことになるが、誰に聞けばよいのか、どのように聞けばよいのかという質問の仕方など情報リテラシーを鍛える場面に多く出会う機会があった。

(v) 質問：「このプロジェクトを通して、何が最も自信になったか」

[回答] やり遂げたことによる達成感。／記事が新聞となり、多くの人の目に留まることになるという貴重な体験からくる自信。／取材しながら知り合った人々から厳しい地域の現状を聞き、現実の社会を垣間見た貴重な体験となった。

(vi) 質問：「このプロジェクトを通して、何が最も困難だったか(辛かったか)」

[回答] 自分たちが活動しているプロジェクトが、本当に地域活性化につながっているのか、単なるイベントになっていないかということが心配になった。

(vii) 質問：「地域の真のニーズを満たし、かつ持続的な活動となるための方策」

[回答] 住民を学生の社会貢献活動に巻き込むこと、学生の活動を地域活性化のきっかけづくりに活用すること、プロジェクトの成果を地域住民の活動につなぐこと。

上記のように、プロジェクトを通して学生の感じ取ったことは大学で学んでいる社会教育や生涯学習の授業で得た知識と現実の社会における事情の関係性に触れたり、新たな認識を持ったりするという貴重な体験になったようである。インタビューを通じてルーブリックでは評価が低かった学生についても、うまくいかなかったという困難体験が逆に自己肯定感につながっている様子が伺われた。

④地域社会の評価

自治体や地域の住民による学生の評価については、評価票や自由記述で実施¹⁰⁾した。自由記述によると、「学生の活動が地域活性化のきっかけづくりや雰囲気づくりに貢献した」、「郷土の町にうずもれた歴史があることを知った」、「町の活性化には若い世代の意見とシニア世代の知識・経験がともに必要であることを感じた」といった意見があった。活動

の内容がインターネットや自治体のフェイスブックで配信され、多くの町民の知るところとなり、自治体や大学に問い合わせの連絡があるなど少なからず反響があった。シニア世代の住民の投書もあり、その投書には人生の歴史を振り返るきっかけとなったとの感謝の言葉が添えられていた。このことを知った学生は、9カ月にわたるプロジェクトで活動した意義を感じさらに自己肯定感を高めたようであった。

5. おわりに ～地域連携における学生の学びの成果と課題～

著者は本稿の「はじめに」で、「地域連携を通して学生は何を学ぶことができるのか。」という問いを立て、学生に身に付けてほしい資質及び能力として市民性を掲げ、学びの手法を米国のサービス・ラーニングに求めた。学生は9カ月間にわたり大学と地域(自治体)の連携事業という機会を得て、現実社会を体験し効果的な学びの成果を得た。

市民性の涵養について、事前事後アンケート、ルーブリック評価(活動日誌)、インタビュー、地域の評価等から取材・フィールドワーク・記事作成等を通して主体的な社会参画の資質及び能力の向上がみられた。例えば、事前事後アンケートから、他者への責任、情報の所存を知る力、活動を工夫する力、行動の結果を理解・分析する力などに学びの効果が認められた。学生へのインタビューでは、地域での聞き取りや取材を通して活用するコミュニケーションがうまくいかなかったことの原因と反省があったが、これも学びの効果である。ルーブリックでは、指導者評価が上位だけでなく下位の学生についても自己評価が高かったことは自己肯定感の高まりだとも考えられる。また、学生の専門性と市民性涵養の関係については、ルーブリックにおける観点評価(「活動と科目との関連性」)において他の4つの観点評価と比較して最も低かったことから活動に関連する科目を学んでいるというだけでは理論と実践の効果的な関係にはならないということがわかった。理論を如何に実践に生かすか、活動のテーマごとに内容を如何に深く掘り下げるかという観点で学生は学び教員は指導すべきである。さらに、学生は自治体及び住民との協働により真の地域課題を発見し

た。インタビューによると、「プロジェクトが、本当に地域活性化につながっているのか、単なるイベントになっていないかということが心配になった。」や「住民を学生の社会貢献活動に巻き込むこと、学生の活動を地域活性化のきっかけづくりに活用すること、プロジェクトの成果を地域住民の活動につなぐこと」とあり今後、住民の主体性にどう生かされていくかとの考えに至ったことも学生の貴重な成果となった。

今回のプロジェクトでは課題も多く残された。教員については、プログラムマネジメントに関して地域の人をより一層巻き込み、学生と一体感をもった活動にしていくこと、学生については、社会の現実、課題の困難さ、解決への地道なプロセスの必要性を体得するため周到な事前準備（活動と授業との関連性を含む）と積極的活動が求められる。大学については、授業とプロジェクトに関するカリキュラムマネジメントの改善（授業と活動の学問的関連性を明確にするシラバス等の作成と学生への周知）、地域（自治体）については、アセスメントを通じた見通しの共有を大学・教員・学生とともに実施することである。地域の評価について「学生の活動が地域活性化のきっかけづくりや雰囲気づくりに貢献した」、「町の活性化には若い世代の意見とシニア世代の知識・経験がともに必要であることを感じた」等学生の活動に評価が高い。持続的な活動にしていくために地域情報の提供、活動を支援する体制の構築を自治体には望むところである。協働のための受け入れ態勢の充実である。学生に対する時代的要請である市民性の涵養と活動の対象である地域の持続的活性化への社会貢献の観点から、さらに改善されたプロジェクトを継続していきたい。

註

- 1) 岡垣町（福岡県）と九州共立大学が結んだ「包括的地域連携に関する協定」（2015）に基づく最初の地域連携事業である。
- 2) シティズンシップ（市民性）に関する具体的資質項目については多様な意見があるが、著者は、主体的社会参画のための自己理解・他者理解・コミュニケーション能力、サービス精神、情報リテラシー、政治的リテラシーを中心的な資質及び能力と考えている。

- 3) 拙著『サービス・ラーニング研究～高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備～』学術出版会、2008。拙著『（改訂）NIE（教育に新聞を）で町づくり～高校生のサービス・ラーニング』鳥影社、2013。などで高校生における自己肯定感をはじめ情報リテラシー・コミュニケーション能力・課題発見力・課題解決力などのスキル、日常生活において主体的に関わる姿勢などの効果を検証した。
- 4) サービス・ラーニングとは、地域社会のニーズを満たした教科カリキュラムと関連したサービス活動を通して、児童・生徒・学生の自己肯定感やシティズンシップ（市民性）を涵養する学びであり、事前学習・活動・振り返り・祝福のプロセスを含む社会貢献型の体験学習である。（拙著「アメリカのサービス・ラーニング」『生涯学習研究 e 事典』（日本生涯教育学会編 <http://ejiten.javea.or.jp/>）
- 5) (1) ①～⑤に関する答申及び条文等はすべて文部科学省ホームページ (www.mext.go.jp) から引用した。
- 6) 地域・大学協働研究会『地域・大学協働実践法～地域と大学の新しい関係構築に向けて～』悠光堂、2014、P2～P9。
- 7) 著者のこれまでの高校生を対象とした実践（サービス・ラーニングによる市民性涵養）において、例えば、国際交流・市民アンケート調査・離島アンケート調査・地域活性化新聞等の活動を通して、責任感・協調性・コミュニケーション能力・課題解決能力等にバランスよく学びの効果がみられ、活動後の達成感や成就感とともに自己肯定感（「本当の貢献ができたと思う」「精神的に成長した」等）の高まりに繋がっていることが認められた。（拙著『サービス・ラーニング研究～高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備～』学術出版会、2008。拙著『（改訂）NIE（教育に新聞を）で町づくり～高校生のサービス・ラーニング』鳥影社、2013。）
- 8) ルーブリックとは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる。（ダネル＝スティーブンス、アントニア＝レビ著、佐藤浩章監訳、井上敏憲、俣野秀典訳『大学教員のためのルーブリック評価入門』2014、P2。）
- 9) アンケート調査の質問事項は50問、プロジェクトの事前事後に同一内容で実施した。主な内容は、以下の通りである。人間形成・社会形成能力（自己理解・他者理解）、課題対応能力（選択能力・問題解決能力・リーダーシップ）、キャリア形成能力（情報収集・情報活用・プレゼンテーション・役割把握・実践力・思考力・計画実行能力）。
- 10) 地域社会の評価に活用した評価票については、次の5項目を数値化した評価である①積極性・主体性、②リーダーシップ、③態度・姿勢、④将来性、⑤マナー。また住民及び自治体関係者に依頼した自由記述式の学生評価も併せて実施した。